伊都国の玉つくり職人のムラ

潤地頭給遺跡

-福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査概要-前原市文化財調査報告書 第89集



2005

前原市教育委員会

前原市は「魏志倭人伝」に登場する「伊都国」の地として知られております。現在では、政令指定都市である福岡市の西隣に位置しており、この立地条件の良さに加え、交通アクセスの改善により福岡都市圏におけるベッドタウンとして発展し続けています。

今回、概要を報告する潤地頭給遺跡の発掘調査は、市内の児童数の増加に伴って計画された前原市立東風小学校の建設に先立って行われたものです。遺跡からは、九州で初の発見となり、調査当時、新聞紙上やテレビ、ラジオなどで大きく報道された玉作工房をはじめ、弥生時代から中世に至る大規模な集落の存在が確認されており、当地が重要な拠点として栄え続けていた事実が明らかとなりました。

本書は、本報告に先立ち、コンテナ数で2,000箱を超える膨大な出土遺物や遺構などの資料の中から特に重要なものを抽出し、まとめたものであり、本市の歴史を理解する上でお役立て頂ければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力とご理解、ご助言を頂きました皆様に感謝申し上げます。

平成17年3月31日

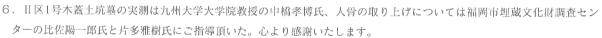
前原市教育委員会 教育長 菊 竹 利 嗣

NATIONAL

前原市

例 言

- 1. 本書は平成14~15年度に福岡県前原市大字潤字地頭給にて実施した潤地頭給遺跡の発掘調査概報である。
- 2. 本書の執筆と出土遺物の実測は前原市教育部文化課の江野道和と江崎靖隆が行い、編集は江野が行った。なお、II区2 号木蓋土坑墓の実測は牟田華代子、石剣実測は山崎賀代子が行い、執筆分担 については文末に括弧書きで記入している。
- 3. 現場における空中写真の撮影および各調査区の合成作業は(有)空中写真 企画に委託した。
- 4. 挿図の製図作業は末益真奈美が行い、イラストについては藤野さゆりが描 画および着色を行った。
- 5. 遺構と出土遺物の写真撮影については基本的に江野と江崎が行ったが、準 構造船や鏡、勾玉等の遺物の一部については フォトハウスOKA (代表 岡 紀久夫) に委託した。

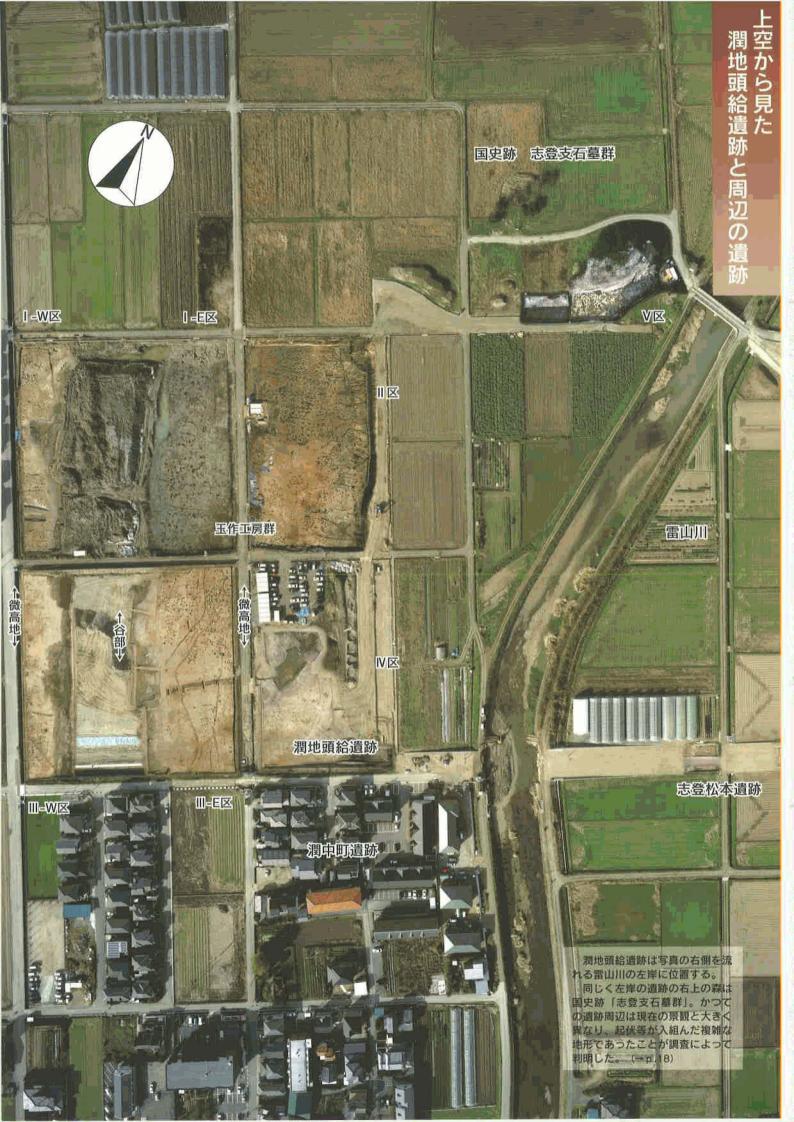


7. 本書の報告内容は資料の整理途中での認識であり、今後、整理が進んだ段階で修正を加えることもある。あらかじめご 了承いただきたい。

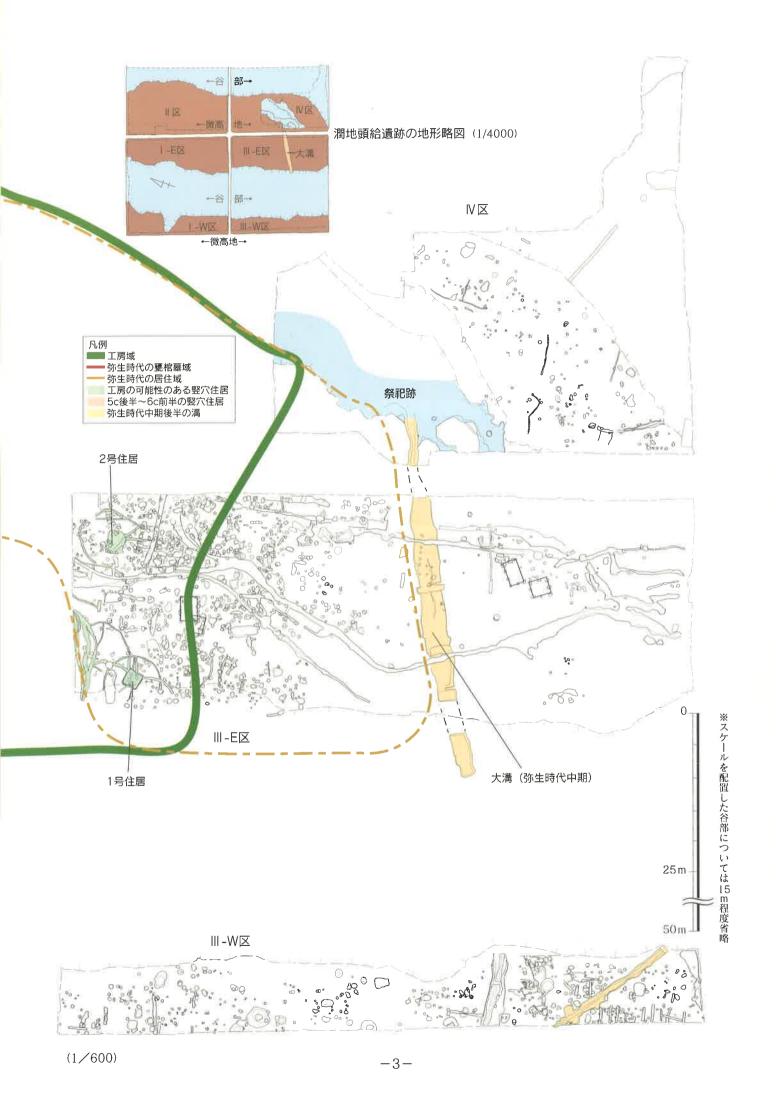
目次

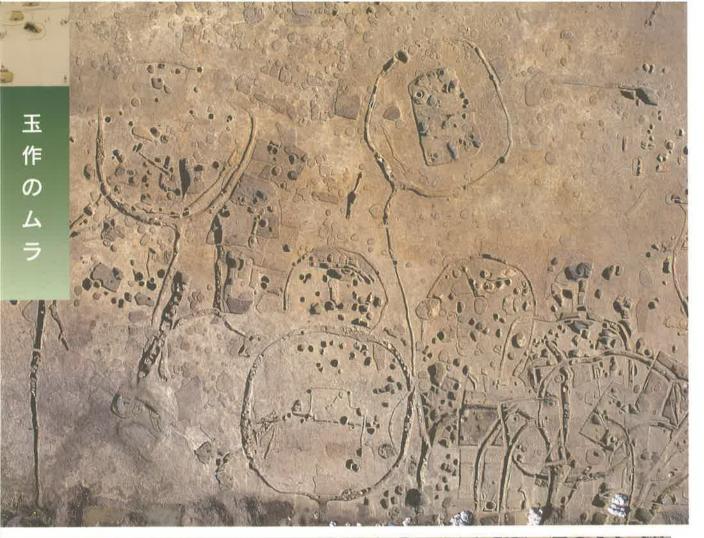
巻頭カラー図版1	6
1. はじめに17	7
(1) 調査の契機と経過 (2) 遺跡の位置と環境	(
2.遺跡の概要18	8
3. 玉作関連の遺構と遺物19	(
(1) 玉作工房(2) 屋外土坑(3) 使用石材と工具	9
4. 準構造船22	(
(1) 井戸 (2) 準構造船部材	10
5. 祭祀土坑24	
(1) 遺構 (2) 出土遺物	

6. 弥生時代の集落25	
7. 古墳時代の集落26	
(1) 竪穴住居 (2) 金銅製剣装具	
8. 弥生時代の墓27	
(1) 甕棺墓 (2) 鏡出土土坑	
9. 古墳時代の墓30	
(1) 木蓋土坑墓 (2) 人骨の取り上げ	
10 おわりに32	













(最上段)Ⅱ区南側の工房のようす

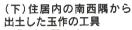
(左) I -E区南側の工房のようす

(右上) III - E区北側の工房のようす

それぞれ工房群の東、西、南部のようす。 工房を中心として溝を掘り、谷に向かって排水を 行っているようすがよく分かる(→P.19)

(右) I -E区 1号住居のようす

住居の中からは作業台 やハンマーなどの玉の製 作時に使用する工具、碧玉 ・水晶・蛇紋岩などの玉原 石等が一式出土している。 かつては多彩な玉を製作 した工房であったと考えられる。(´)内が下の写真の範



住居の隅からハンマー として使用した「叩き石」 が2個同時に並んで出土 した。





(右) I-E区 10号住居内の作業用土坑のようす 住居の床に掘られた右下の浅い穴(土坑)の中と この周辺から合わせて3個の砥石が出土した。玉 作の作業に使用した可能性がある。(→P.20)

(左下) I-E区 6号住居内から碧玉が出土したよ うす

(右下) I -E区 8号住居内から水晶製の玉の未製 品(算盤玉)が出土したようす

この住居からは水晶が数多く出土しており、水 晶製の玉を専門に作る工房であったと考えられて いる。









(上)水晶の屋外作業用土坑のようす

透明または自色の破片が水晶で右下の2点が砥石、右端中央の 上点が叩き石。玉作の作業後にいらなくなった工具や破片を埋めた 穴であろう。 (→ P-20)

(右)屋内と屋外に掘られた作業用土坑のようす 左奥が水晶の屋外作業用土坑。中央の土坑は竪穴住居の床に掘ら れた土坑で、中から筋の入った砥石や鉄製工具が数多く出土してい

(下)碧玉の屋外作業用土坑のようす

砥石の左下に散らばる深緑色の破片が、管玉の原材料になる碧玉。





(左)溝の断面のようす 逆台形に掘られているのがわかる。

(下)同一の溝から出土した土器一括 土器は工房から出土する例が少ないため、このような溝の 中から出土した土器が工房の操業時期を決定する貴重な資料 となる。





自主製管玉の製作工程資料 上製金側の原宿から下製名側の穴の開いを求製品にかけて一連の製作工程のもかる資料。(+)P-21)





的数岩型の勾里と原道(+>P.21)

次量製玉の製作可養資料 上製石並あら点の水量原石から下製石戸かって、玉を製作する手順の食くもかる資料。(→P.21)





(3)有美观。16

以力中の原理と設計





叩き石



俄製加工具 定より数字り、銀/2、鉄針。(→P.21)

三の製作を使用した取石 大型のものや小型のもの、前の 入ったもの、平取るなど製作する 玉の種類や工程を合わせてきまざ まな取るがあるととがわかる。(+) P.20)



準構造船の断面を復元したようす (日本財団図書館 船の科学館ものしり シート準構造船断面図より一部改変)



準構造船の材木を再利用した井戸 発見時、準構造船の部材は井戸の外枠となっていた。船と しての役割を終えた材木を再利用したものであろう。なお、 この井戸の中からは大量の上器が出土しており(最下段の写 真)、井戸の埋め戻しに伴って終祀を行った時に落とし込ん だものと考えられる。(→P.21)



準構造船の復元想定図 全長約6m程度の船が想定される。 (下長遺跡準構造船復元想定図より一部改変)



井戸の中から出土した土器群









(最上段)弥生時代の大溝 弥生時代の集落の南限を示すと考えられ、長さ約50mに渡 って掘られている。(→P.25)

(2段目左上)西側落ち込み部分での祭祀のようす 底に穴を開けた土器が大量に出土するなど、特殊な遺物が 目立つ。

(2段目右上)大溝の断面

(左上)金銅製剣装具(→P 27)

(右上)古墳時代の竪穴住居のようす (→ P.26) 左側の住居内から金銅製剣装具が出土した。

(右)金鎚の出土したようす







(上)龍と思われる絵を描いた壺(→ P.24)

(右)山陰系の甑形土器 遺跡からは山陰のものと似通った土器が数多く出土しており、玉作の時期には山陰地域との深い係わりがあったと考えられる。

(左下) I -E区 16号祭祀土坑のようす(→P.24)

(右下) I-E区 16号祭祀土坑から出土した土器

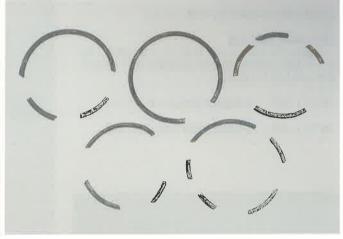




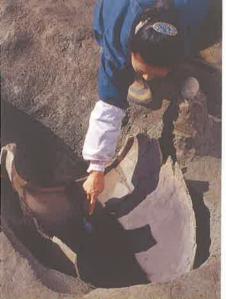








(最上段)銅の腕輪(銅釧)を副葬した299号甕棺のようす(一P,27) (左上)銅釧が出土したようす (右上)銅釧の接合写真





(左端)石剣の切先が出土した195号甕棺 (→ P.27) 指の先が石剣の出土した位置。

(左)195号甕棺内から石剣が出土したようす



(上) 銅鏡と勾玉が出土したようす(→P.29) ↓部分から銅鏡の破片、U部分から勾玉がじ。の部分から朱(左上の写真がアップ)が出土した。攪乱により割れてばらばらに散らばっているのがわかる。

(左上)朱を散布したようす。 点線の棺の外側と思われる部分を朱で散布しているようすが見られた。





銅鏡の鈕の部分が出土したようす



ヒスイ製勾玉(実寸の約3倍)

銅鏡 蝙蝠座鈕「位至三公」銘八弧内行花文鏡(実寸) 鉳の下に「至」の文字が読める。



子供用と大人用の2基の木蓋土坑墓が並んで発見されたようす(-+P.30)



(左)子供用の木蓋土坑墓

(上)大人の頭骨の上から鉄鏃が出土したようす 鉄鏃はもともと木蓋の上に副葬していたと思われる。年月を経て蓋が朽ち、鉄鏃が棺内に落ち込んだものであろう。

1. はじめに

(1)調査の契機と経過

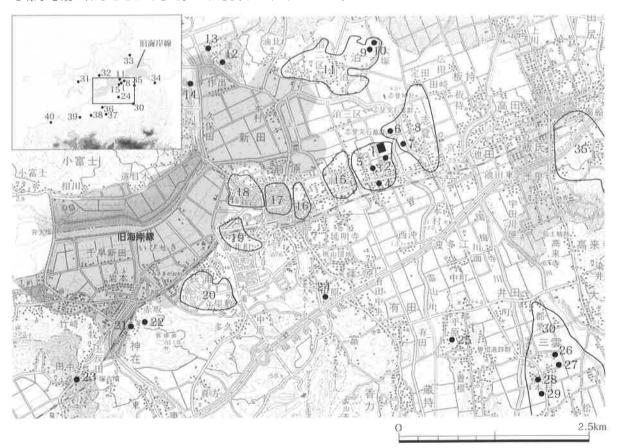
潤地頭給遺跡は福岡県前原市大字潤字地頭給地内に所在する。調査は前原市内の前原・波多江両小学校の児童数の増加に伴って策定された分離校建設の開発計画に端を発する。当該地は周知の文化財包蔵地である潤遺跡群内に含まれており、周辺には国史跡の「志登支石墓群」をはじめとする重要な遺跡が分布している。このことから、調査以前にも重要な遺構の埋蔵が想定される場所であった。

平成14年7月に調査区内の遺構の状況と内容を知るために約1ヶ月間をかけて全域を対象とした試掘調査を行った。この結果、弥生時代前期末~中世にかけての複合遺跡であることが判明し、遺構が濃密に分布している状況と旧地形が複雑に入り組んでいる様子を窺い知ることができた。これを受けて本調

査は翌、平成15年1月15日~平成16年3月19日のおよそ1年2ヶ月をかけて実施した。

調査は小学校建設予定地内を4つの調査区に分割し、これに工事用仮設道路敷き部分の1つを加えて計5工区とした。基本的に南側に位置するIII、IV区の運動場予定地については全掘せず、内容を確認するに止めた。中でも、大溝や東側落ち込み部での祭祀跡等の重要遺構については規模を確認するためのトレンチによる断ち割り調査を実施し、現地保存とすることにした。また、北側に位置するI、II区については建築物による掘削を受けると想定される微高地上について全面調査を行い、谷部分については現状保存とした。残るV区については、東側の遺構が存在する部分に限定し調査を行った。

なお、調査面積は全域に当たる40,000㎡のうち、 谷部などの保存部分を除いた約半分に当たる 22.000㎡である。



1.潤地頭給遺跡 2.潤中町遺跡 3.潤神社古墳 4.潤壱丁田遺跡 5.潤遺跡群 6.志登支石墓群 7.志登松本遺跡 8.志登遺跡群 9.御道具山古墳 10.泊大塚古墳 11.泊遺跡群 12.津和崎権現古墳 13.後口古墳 14.稲葉古墳 15.浦志遺跡群 16.上町向原遺跡 17.北本町遺跡群 18.北新地遺跡群 19.筒井町遺跡群 20.荻前遺跡群 21.釜塚古墳 22.神在横畠遺跡 23.一貴山銚子塚古墳 24.上鑵子遺跡 25.平原遺跡 26.端山古墳 27.築山古墳 28.三雲南小路遺跡 29.井原鑓清遺跡 (推定地) 30.三雲・井原遺跡群 31.新町遺跡 32.一の町遺跡 33.小葎遺跡 34.今宿五郎江遺跡 35.飯氏遺跡群 36.東遺跡群 37.本遺跡群 38.石崎遺跡 39.深江井牟田遺跡 40.水付遺跡

(2) 遺跡の位置と環境

潤地頭給遺跡は現在、糸島平野のほぼ中央部に位 置している。この平野は南側にそびえる背振山系に 源をもつ瑞梅寺、雷山、長野の3河川の沖積作用に よって徐々に形成されたもので、弥生時代において は東に位置する今津湾と西の加布里湾とが内陸部に ある遺跡付近まで大きく湾入していたものと思われ る。したがって、かつて遺跡は現在の田園風景の中 とは大きく異なり海岸近くに立地していたのであろ う。また、遺跡のすぐ脇には前記の河川の一つであ る雷山川が流れる。この河川は背振山系を構成する 雷山に源を発するもので、遺跡の東側で北流し、や や下流の北東側に至って大きく流れを西に転じ、泉 川と名称を変えて加布里湾へと注いでいる。これに ついても、昔は遺跡のすぐ傍で海へ注いでいたと推 測される。したがって、弥生時代~中世の間、この 地に居住した人々は海岸と河川との接点である立地 を大いに生かして、海洋と内陸との交通の要衝とし て栄えたものと考えられる。水に深い関わりをもつ 潤という地名からもこの一端を窺い知ることができ よう。

潤地頭給遺跡と同様、加布里湾の旧海岸線に沿って海浜集落と言うべき遺跡が連なるように分布する状況が徐々に、判明しつつある。まず、目を西方面へ向けると、小銅鐸の発見された浦志遺跡群をはじめ、素環頭大刀と甕棺墓群が発見された上町向原遺跡、弥生時代~古墳時代にいたる集落である北本町遺跡群や北新地遺跡群などがあり、目を東に転じると志登遺跡群、湾を挟んで北側には泊遺跡群が存在する。これらの遺跡からは楽浪系韓式土器などが出土しており、伊都国における交易の窓口として共に重要な役割を担っていたことがわかる。

また、遺跡周辺を見ると北東の周辺より一段高い沖積台地上には国史跡の志登支石墓群、西側には弥生時代~中世の遺構を包含する潤屋敷遺跡、南には円形浮文を口縁部に施した畿内系の大型の複合口縁壺を出土した潤中町遺跡が所在する。このことから、

潤地頭給遺跡を含めた周辺地域は弥生時代から中世 にいたるまで数度の断絶期間が想定されるものの、 人々が住み続けていた重要地点であったことがわか る。

なお、伊都国の中心域である三雲・井原遺跡群は 東南方向に4kmほど離れた場所に所在する。

2. 遺跡の概要

潤地頭給遺跡の地形は大きく分けて南から北に向かってなだらかに下る2本の微高地と、これを隔てる2本の谷によって構成される。このうち、今回の調査によって最も内容が明らかとなったのは中心に位置する微高地で、主に弥生時代前期末~後期前半の居住域と墓域を含む集落、弥生時代終末期~古墳時代前期前半の玉作工房群、古墳時代中期の集落、奈良時代の井戸や蔵骨器等の遺構や遺物が検出された。これにより、長期に渡って人々が居住する状況が見えるとともに、広大な工房域が展開されることから糸島半島の中でも重要な拠点の一つであったことがわかる。しかしこの一方、調査前に期待されていた弥生時代早期にあたる志登支石墓群の関連遺構は発見されず、これを営んだ人々の集落の位置については今後の課題として残った。

また、調査区西側(I-W区、II-W区)に位置する ている。地の裾部分からは弥生時代中期の溝、中世の壕、 制質の井戸などが発見されている。したがって、調査区外に当たる西側の尾根部分には弥生中期~中世までの集落が展開しており、特に中世には豪族の居館的な役割を持った建物が存在する可能性が示唆された。加えて北東側のV区の調査によって、志登支石墓群周辺の地形が明らかとなり、昭和28年に行われた文化庁による調査時に言われていたとおり、 周りに比べ一段高く見晴らしの良い沖積台地上に営まれた状況がより明確となった。

3. 玉作関連の遺構と遺物

(1) 玉作工房

王作工房は調査区の中央部に派生する微高地上に 広がる。工房域は北限については調査区外に続いて いるため窺い知ることは不可能であったが、東西方

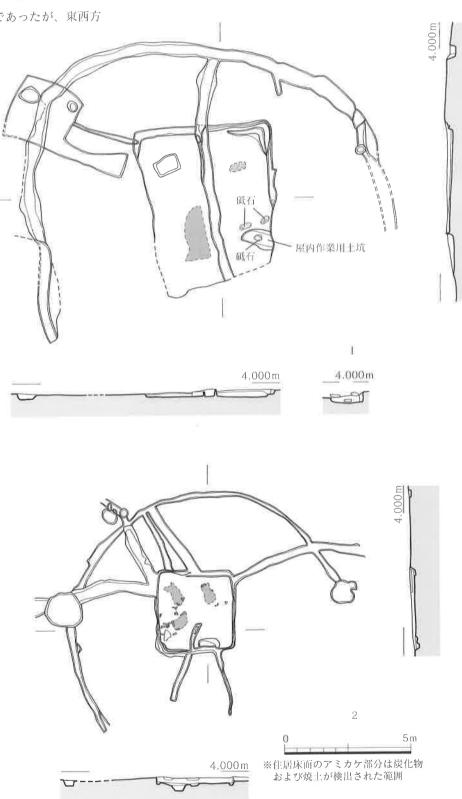
向については鞍部幅一杯に広がっている状況が判明した。検出された部分で南北130m、東西80m、面積約9600㎡以上の広大な面積を占めていた。工房はこの区域内に33軒が営まれており、微高地の頂上部分が現況で大きく削平されていたことから、かつてはより多く存在したことが想定される。

工房は竪穴住居の形態をとり、 平面プランは隅円方形または不 正隅円長方形で床面に柱穴を持 たず、周囲に円形の排水を巡ら せるものが多い。したがって、 上屋構造は切妻屋根を葺き下ろ したいわゆるテント状の簡易的 なものであったと考えられる。 しかし、中には6.2m×4.2m の比較的規模の大きなものも存 在し、柱のない構造では不安定 であると思われるため、作業場 を広く確保するために、床面の 柱を意図的に除いたということ も考えられる。なお、例外的に Ⅱ区22号住居のみは4本の主 柱穴をもつ。

工房群は遺物と施設の検出状況によって大きく3つに分けられる。①屋内に作業用の施設を持ち、工具類や石材が出土する

もの、②施設はないが石材の出土を見るもの、③これらはないが構造が類似するものとに分かれ、可能性の高低があると考えられる。なお、名称については竪穴住居の形式を採っているためこれを用いた。

以下、2軒の工房について見て行きたい。



第2図 I-E区 10号住居およびIII-E区 1号住居実測図 (1/150)

Ⅰ-E区 10号住居 (図2-1) 平面形態は隅円 長方形で、周囲に半円形の溝を巡らせる。規模は約 6.2m×5.5mで床面には柱穴がなく、斜面上部の 東側にのみ壁溝を有する。屋内の玉作製作に関連する施設としては西南の隅に作業用の土坑が掘削されており (図2-1、P.5)、この内側から砥石が1点、周辺から2点が出土している。また、床面には2ヶ所ほど焼土と炭化物の混じった部分があり、炉の可能性が考えられ、玉の製作途中で火を加えるための施設であったと思われる。石材としては碧玉と水晶の2種類の未製品や剝片、チップが出土しており、多様な玉を製作していた可能性がある。なお、住居の中心を貫く溝は重複しているものであり、廃絶後に掘削されたものと思われる。

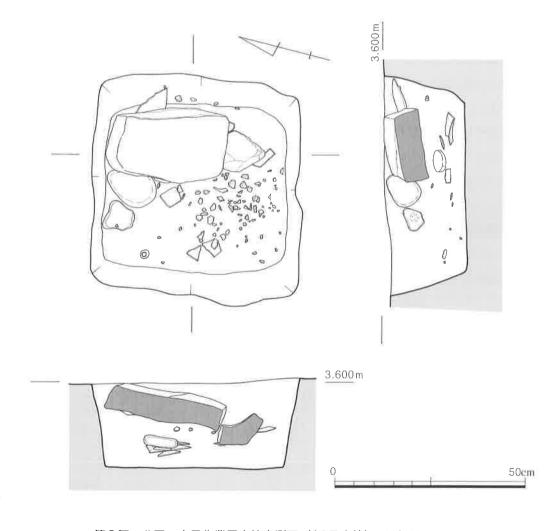
Ⅲ-E区 1号住居(図2-2) 工房域の南限に位置する。平面形態は隅円方形で、規模は工房群中最

も小さく、約2m×2mの規模をもち、周囲に円形 の溝を巡らせる。屋内には全周に壁溝を巡らせ、西 側の斜面下部に向けて排水を行う。屋外の円形溝と 壁溝の間は5本の溝で接続されている。床面には3 ヵ所の炭化物の分布する部分があり、火を使用した 可能性が考えられる。 (江野)

(2) 屋外土坑

I-E、II区を中心に屋外の作業用土坑または廃棄 土坑が確認されている。この中でも、II区の21号 住居の南隣に位置する20号土坑は、水晶剝片と石 製工具が一括で確認されている(図3、P.6)。

土坑は、長さ57cm、幅55cm、深さ23cmの正方形を呈するもので、上層からは、平砥石3個、叩き石1個が出土している。平砥石の下層からは、大型壺の口縁部片、長胴甕の口縁~胴部片などが出土して



第3図 Ⅱ区 水晶作業用土坑実測図(20号土坑) (1/10)

おり、弥生時代後期後葉~終末期に比定される。水 晶は、上下層共に多く見られたが、全て剝片のみで、 製品、未製品が発見されていない。出土状況から、 住居内で行われた水晶の剝離調整終了後に、屋外土 坑に廃棄されたものと考えられる。

また、この他にも、碧玉片が少量、滑石製の玉が 1個出土している。

(3) 使用石材と工具

石材と製品 (P.8、9) 本遺跡から出土した石材としては碧玉、水晶、メノウ、鉄石英、蛇紋岩がある。出土数としては碧玉が最も多く、次いで水晶が出土し、メノウ、鉄石英、蛇紋岩についてはごく少量である。遺跡全体での出土量は、碧玉で約2kg、水晶で約560gと玉作遺跡にしては少量である。

一方、出土傾向として、I-E区の工房域からは碧玉、II区の工房域からは水晶がそれぞれ多く出土する。このことから、碧玉を使用する工房と水晶を使用する工房は立地を異にすることが考えられるが、I-E区8号住居では碧玉よりも水晶が目立って出土している。仕上げのみなど各生産工程における副次的な生産として行われた可能性も考えられる。

碧玉は九州では原産地が確認されていないが、肉 眼的な観察では島根県花仙山産の碧玉に酷似してい る。また、祭祀土坑や玉作にともなう排水溝からは 山陰系甑形土器などが見られることから、山陰との 関係が深いと考えられる。

水晶は地元の原石を用いている可能性があり、糸 島半島では基盤岩である花崗岩、花崗閃緑岩の中に 貫入する石英鉱脈中に見られる。水晶の原産地とし て、福岡市西区叶ヶ岳、二丈町浮岳、志摩町立石山 などが挙げられるが、いずれも原産地としての確定 が行われていないため、今後の検討課題である。

本遺跡では碧玉製管玉、水晶製小玉・丸玉・算盤 玉、蛇紋岩製勾玉が製作されていることが明らかに なっており、各製作工程が追える資料がある。

製作技術の概要について述べると、碧玉製管玉は

①原石②鉄製工具を用いて、方形に近いまで粗割を行う③角柱体を作りやすいように、意図的に鉄製工 具の打面を作り出しておく④角柱体を作り出す⑤角 柱体の稜を削ぎ落とす⑥目の粗い砥石で研磨して丸 みを出す⑦両側から鉄錐で穿孔する⑧目の細かい砥 石で研磨して、きれいな丸みと光沢を出して完成と いう工程で、太形のものと細形のものがある。

一方、水晶製小玉・丸玉・算盤玉については①原石②原石の基部と頭部を先に除去して、六角柱を作り出す③六角柱の稜を削ぎ落とす④中心から縦割りをして半分にする⑤敲打して丸みを帯びさせる⑥片側から鉄錐で穿孔する⑦目の細かい砥石で研磨して、きれいな稜と光沢を出して完成となる。

蛇紋岩製勾玉は、小ぶりで扁平なものであるが、 製品、未製品が出土しているものの工程まで追える 資料が出土していない。メノウ、鉄石英に関しても 資料不足のため、製品までの特定ができないが、他 地域の玉作遺跡の事例から、時期的にメノウ製勾玉、 鉄石英製管玉を製作していたと考えられる。

工具 (P.9) 碧玉、水晶の玉作に伴う工具には 砥石、叩き石、鉄製加工具などがあり、住居内や排 水溝、土坑から出土している。

砥石には、全面研磨に使用されたと考えられる筋 砥石と筋のつかない平砥石があり、遺跡全体では 50点以上にのぼる。筋砥石には、筋の断面がU字 形のものとV字形のものとがある。平砥石には、大 型から小型のものまで多種多様であるが、大型のも のは目の粗い砂岩が利用されることが多く、小型の ものは粘板岩が利用される傾向にある。

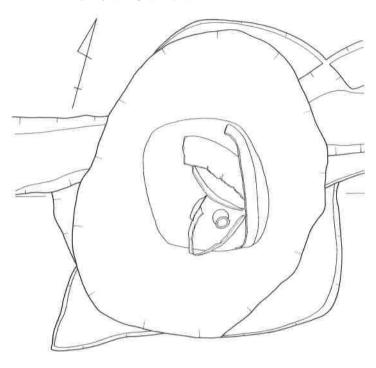
鉄製加工具は、打割具である鏨状鉄製品と穿孔具である錐状鉄製品が出土している。錐状鉄製品は細いもので長さ1.15cm、幅1mmを測り、断面が四角状となる。鏨状鉄製品は長さ3.5cm、幅1cm、厚さ0.4cmの板状鉄製品で、原石や結晶体の打割に用いられたのであろう。

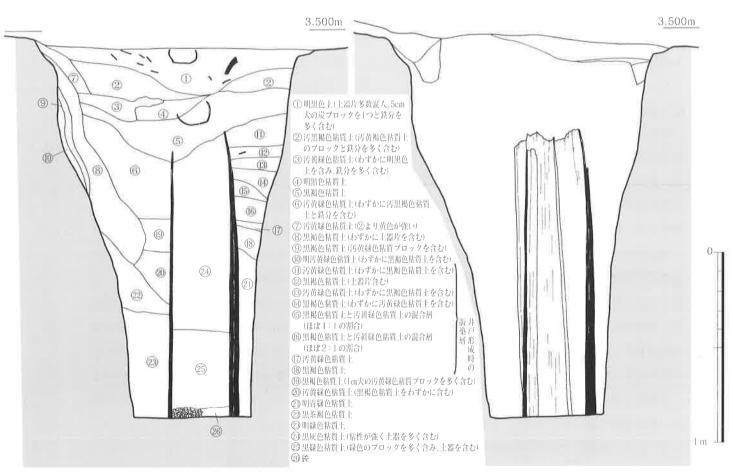
4. 準構造船

(1) 井戸 (図4、P.10·II)

II区東側谷部付近で井戸枠が良好に残る 井戸を検出した。掘り方は長さ4m、幅 3.3mの不整形を呈する。II区10号住居の 谷部に向かって流れ込む排水溝を切り込ん で作られている。井戸は、径60cm、深さ 約2mを測り、井戸枠は土圧によって内部 へ動いた状態であり、計6枚の部材によっ て円形に構成されている。

井戸枠内からは長頸壺、短頸壺、庄内式 上器を含む約20個体の土器が検出され、 口縁部や胴部の打ち欠きや中に朱の痕跡を 残すものが認められることから、井戸を廃 棄する際に祭礼が行われていたと考えられ る。 また、井戸の底面には砂利を敷いており、浄水作 用があったものと思われる。





第4図 Ⅱ区 井戸実測図 (1/20)

(2) 準構造船部材 (図5、P.10)

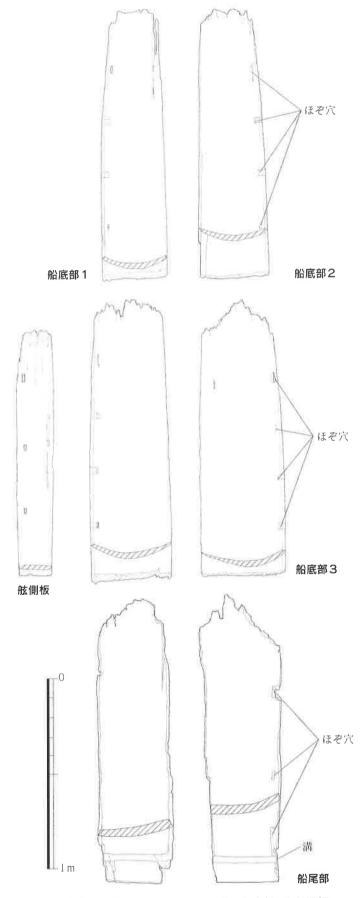
井戸枠の取り上げ過程の中で、準構造 船部材を転用したものであることが明ら かになった。出土した部材は船底部3枚、 船尾部1枚、舷側板1枚の計5枚である。

船底部は最大で、残存長約1.5m、幅82cm、厚さ3.5cmを測り、断面がU字形を呈する。両舷には25cm間隔のほぞ穴が見られ、桜の樹皮と考えられる木栓が良好に残る。船の外面のほぞ穴には舷側板を取り付けるための面取り調整がなされている。船尾部は長さ1.2m、幅65cm(最大)、厚さ4.5cmを測り、両舷にほぞ穴が見られ、滞を切って板をはめ込む仕口が施されており、船尾部分と考えられる。舷側板は長さ1.5m、幅23cm、厚さ2.5cmで、ほぞ穴が見られるが、船底部、船尾部のほぞ穴とは間隔が合わず、2隻以上の船を解体して、井戸枠に転用している。

福田さよ子氏(奈良県立橿原考古学研究所) による樹種鑑定の結果、船底部、舷側板 についてはスギ材、船尾部についてはク スノキ材を使用している。

船の湾曲や幅に対する長さの比率から 全長6m前後を想定しており、船尾部の 仕口から、福岡市吉武高木遺跡群から出 土している木製模造船と同じく、船首と 船尾を作り分けた形の船であったと考え られる。

時期については船が使用され、転用、 廃棄されるまでの期間を考慮し、弥生時 代後期後葉~終末期と考えたい。この時 期は玉作の時期とも重なり、玉の原材料 や製品などの搬入、搬出に使用されたの であろうか。 (江崎)



※船底部1と2は接合せず別個体。船底部3と船尾部の それぞれの2枚については同一個体である。

第5図 準構造船部材実測図 (1/20)

5. 祭祀土坑

(1)遺構

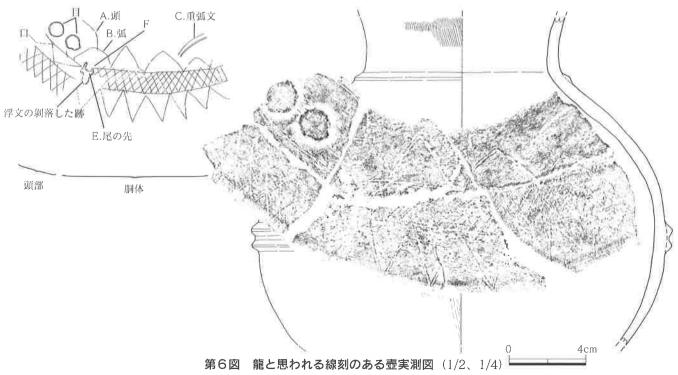
祭祀土坑は大きく弥生時代中期後半と後期後半から古墳時代前期前半の時期に作られている。このうち、前者は甕棺墓群に伴う祭祀坑と考えられ、後者は玉作工房群の時期とほぼ合致する。以下後者の土坑の内、二基を抽出してみたい。

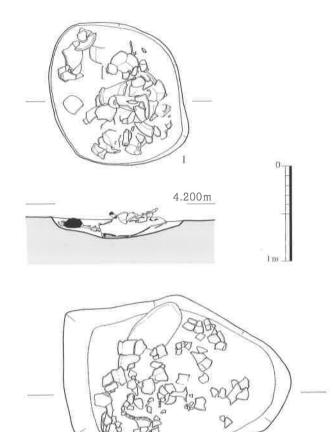
I-E区 20号祭祀土坑 (図7-1) 平面は不正 形で、底部は皿状を呈する。土坑内からは弥生時代 終末期の土器が多く出土しており、目を引くのは山 陰系の甑形土器 (P.13) と内面に朱が付着し、外面に煤の痕跡が見られる土器である。このうち、甑形土器は高さ約30cmと横方向の把手が一ヶ所残存する。 作りは粗雑で内面はタテハケ・外面はヨコハケを施し、器壁は1cm~0.7cm前後で分厚い。なお、甑形土器は他に土坑や溝、ピットからも数点出土しているものの完形になるものはなく、使用方法については 疑問が沸く。また、調査区全域からは数多くの山陰系の土器類が出土しており、本遺跡と山陰地域との繋がりの強さが示唆される。

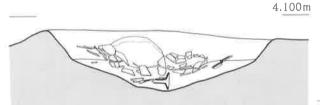
I-E区 16号祭祀土坑 (図7-2、P.13) 平面 は不正形で、底部は20号祭祀土坑同様に皿状を呈 する。土坑の中央付近からほぼ完形の高坏が土圧で 潰れた状況で出土しており、時期を知る貴重な手掛かりとなっている。

(2) 出土遺物

龍と思われる線刻を施した壺 (I-E区10号祭礼土坑 出土。図6、P.13) 頸部から胴下半部にかけておよ そ1/3が残存した状態で出土した。まず、土器の調 整については線刻を描いている肩部はナデ消し、頸 部の突帯に近い部分では横方向のナデ消しを行って いる。また、胴部中位の突帯から下と頸部の上半部 についてはハケ目をナデ消しているものの粗く、ハ ケ目が部分的に残る。内面はハケを行った後、粗い ナデを施している。全体的にみて、線刻を行ってい る部分以外の調整は粗い印象を受ける。なお、遺構 内に同一個体の土器片が出土していないことから、 祭祀に伴って土坑外で破砕されたものを坑内に廃棄 した可能性が示唆される。時期については弥生時代 後期後半~終末期に属すると思われる。つづいて線 刻についてみていく。線刻は肩部の貼付突帯と胴部 中位の二重突帯の間に描かれている。大きく鋸歯、 斜格子、弧と浮文によって構成されており、左側に 頭部、右側に胴部を配置する。頭部には円形の浮文 で「目」、鋸歯文で口の中の「歯」、Aの一重の弧で 頭の輸郭を表現している。また、胴体の背と腹には







2

| -E区 20号および16号祭祀土坑実測図 (1/40) 第7図

鋸歯文で鰭(鬣?)を、胴体には斜格子文で鱗を表 現している。頭と胴の間のEの部分には浮文状のも のが剝落した痕跡が残っており、Fの位置で線を止 めている。これらからE~Fのラインで一度絵が終 わり、かつては浮文等で尾の先端を表現していた可 能性が考えられる。したがって、頭部には左側から 胴体が接続していたと想定され、描かれている龍が 一頭の場合は肩部を反時計回りに巡り、二頭の場合 は対角線上に顔が配置されていたものと思われる。 なお、A、B、Cは先の丸い工具で描かれており、 線が柔らかく浅く、他は先の鋭い竹篦か刀子状の工 具を使用している。

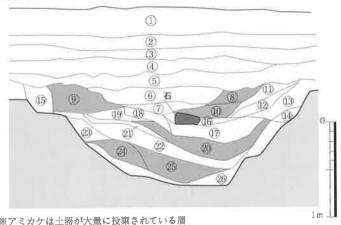
6. 弥生時代の集落

弥生時代の集落は前期末から後期前半まで営まれ、 中期後半に盛期がある。居住域は大溝を南限とし、 微高地の南から北東方向に向かって広がる (P.2、3)。 住居については竪穴住居が検出されなかったため、 掘立柱や壁立であったと考えられる。土器以外の主 な出土遺物としては石錘や土錘等の漁撈具、石庖丁 等の農具、工具、石剣や投弾等の武器類が出土して おり、生業形態を窺うと共に社会背景を知る上での 貴重な資料となった。

Ⅲ-E区 大溝(図8、P.12) 大溝は微高地を東 西に断ち切り、約50mの長さに渡っている。幅と深 さは残りのよい部分で約4m×1.5mで断面は逆台形 を呈する。中から大量の土器が出土しており、大き く3時期に分けて投棄した様子が観察できた。しかし、 それぞれの層の土器を比較したところほとんど時期 差が見られないことから比較的短期間に埋まったこ とが想定される。なお、大溝東端の微高地の落ち込 み部分では祭祀が行われており、底部に焼成後の穿 孔を行った土器などがまとまって出土している。

(江野)

5.500m



※アミカケは土器が大量に投棄されている層 @明灰褐色粘質土 (@よりやや明) ① 加耕作土 ②畑耕作土 (①よりやや明) ③旧水田耕作土 口暗青灰色粘質土 ④旧水田床土 潜水層 ⑤旧水田床土 (土器包含層) 08暗青灰褐色粘質土 ⑥灰褐色粘質土 (鉄分を多く含む) 20弥生土器層 -(?)暗灰褐色粘質土 ②暗青灰色粘質土 8) 灰褐色粘質土 土器廃棄層 〈上層土器群〉 9 弥生土器層 23暗寄灰色點質十 00你生土器層 @暗青灰色粘質土 ①明褐色粘質土 (地山が流入したもの) 12 明灰褐色粘質土 28弥华十槑屬 (3)明灰褐色粘質土 (土器片を含む) **%**暗青灰色粘質土

19川褐色粘質土 (別遺構による攪乱) 明暗青灰色粘質土 (大きな石を含む) 鱼暗背灰褐色粘質土 土器廃棄層 <中層土器群> の暗書灰色點層十 (20)よりやや暗) 土器廃棄層 <下層土器群>

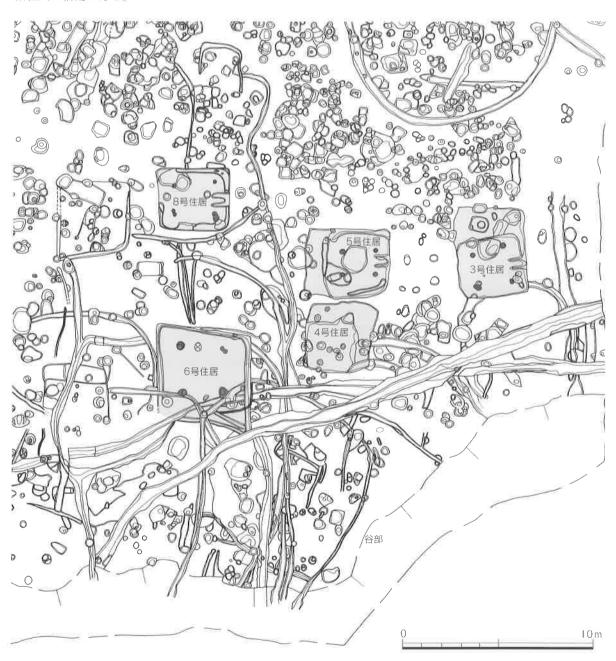
第8図 Ⅲ-E区 大溝a区土層断面図 (1/40)

7. 古墳時代の集落

(1) 竪穴住居 (図9、P.12)

3~6、8号竪穴住居はII区北側に位置し、5世紀 末~6世紀前半の時期である。これらの住居は半円 形に巡る溝によって区切られており、谷部に向かっ て掘削されていることから、排水を兼ねていたので あろう。残りの良いものは長方形プランで、長方形 の掘り方の中に1段のテラスと方形の掘り方をもち、 四柱穴の構造である。 3、5、8号住居は北壁にカマドをもつ住居で、その中でも、8号住居は炭化した屋根材が床面で確認された。6号住居では6m×4+αmと他の住居より一回り大きいが、住居内には壁沿いに排水溝を巡らし、外の排水溝と連結する。埋土から金槌、鉄片、砥石等が検出され、鍛冶炉は発見できなかったが、鍛冶工房であった可能性がある。

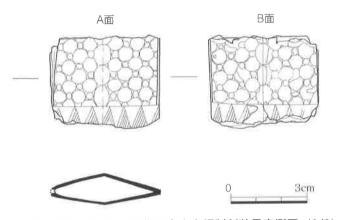
一方、4号住居はL字のベッド状遺構をもつ特殊 な建物で、ベッドから金銅製剣装具が出土している。



第9図 ||区 古墳時代の竪穴住居遺構配置図 (1/200)

(2) 金銅製剣装具 (図10、P.12)

4号住居のベッド状遺構から出土した金銅製剣装具である。長さ3.6cm (残存)、幅4.3cm (残存)、厚さ1.2cm (稜部分)を測る。毛彫りによって割付線を施し、割付線の上側には六角文と小六角文を組み合わせた文様を施し、下側には鋸歯文 (鋸歯の中に斜線)を施す。上側の文様は、稜から左右に毛彫りしており、端部へ行くにつれて、六角形が崩れている。六角文の配置から、亀甲文を意識しているのであろうか。A面、B面ともに同文様が施され、鍍金するが、B面は風化が著しい。断面形状から、剣装具を想定している。 (江崎)



第10図 ||区 4号住居出土金銅製剣装具実測図 (2/3)

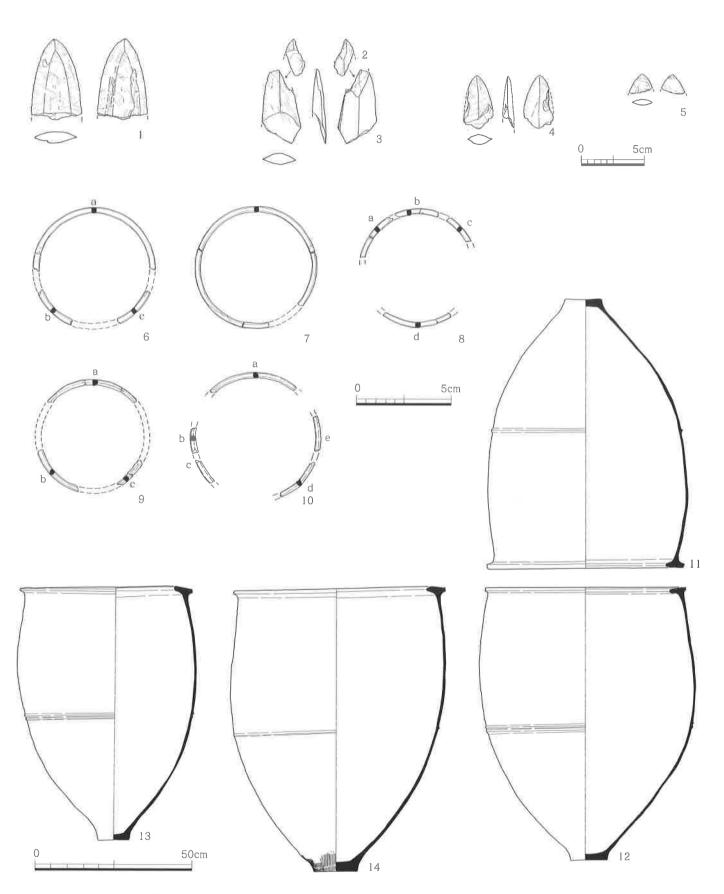
8. 弥生時代の墓

(1) 甕棺墓

整棺墓域は微高地上の北西部分に広がる。墓域の 北端は調査区外に続くため確認できなかったが、南 北約100m、東西約30mの範囲が検出され、東側 には居住域との境界を示す溝が南北方向に掘削され ている可能性がある (P.2)。 甕棺墓は小児、成人合 わせて360基が検出されている。 甕棺からの出土遺 物は少なく、円環形銅釧を副葬しているものが1基、 石剣の切先部分の遺存するものが2基であった。以下、 これら3基について見で行きたい。

なお、墓域の営まれた時期は弥生時代前期末頃から後期の前葉頃までと考えられる。

299号甕棺墓 (図11-6~12、P.14) 上熟 (11) は器高80.9cm、口縁部径63.1cm、底部径11.7cm、 胴部最大径57.6cmである。胴部にやや丸みを帯び、 低い三角の1条突帯を巡らせる。下甕 (12) は器高 86.5cm、口縁部径64.2cm、底部径11.5cm、胴部最 大径69.0cmである。口縁部は内傾し、胴部にやや 丸みをもち、低く稜のあまい三角の2条突帯を巡ら せる。この上下棺はいずれも内外面に黒塗を施して いると思われるが、下棺については風化による剝落 が激しい。時期はIIb期にあたる。つづいて副葬品 である銅釧は上甕の口縁部のすぐ下から出土してお り、土圧によって折れて散乱した状態であった。断 面形態や径などを元に、接合を行った結果、5本以 上である可能性がでた。それぞれの個体について述 べると、6は直径6.5cm、断面はやや扁平な長方形 で2.5mm×3mmである。4片に分かれており、aの部 分で2片のみが接点をもつ。このうち、aとbは断面 形態および色調等類似しているため同一個体である 可能性が高いがcについては表面の風化が激しく、 断定はできなかった。7はもっとも残存状態の良好 な銅釧である。直径6.7cm、断面形と太さは6と同 様である。4片に分かれており、完形とはならず途 中が1箇所抜ける。8は直径6.2cm、断面形と太さは 6と同様である。7片に分かれておりa、b、dはそ れぞれ2片が接点を持つ。断面形態と色調からa、b、 cは同一個体の可能性が高い。9は直径6.05cm、断 面形態は半円形を呈するいわゆる蒲鉾形で、3mm× 3mmの太さである。残存状況が悪く、6片に分かれ、 a、b、cの径は同一であるが接点をもたず、bにつ いては色調が他のものとやや異なるため、同一個体 と断定するに至らなかった。10は直径6.9cm、断面 形と太さは9と同様である。7片に分かれており、a では3片が接点をもつ。色調や断面形態から、bとc、 dとeは同一個体の可能性があると考えられる。 **195号甕棺墓** (図11-2~5·13、P.14) 甕棺は単 棺で器高80.9cm、口縁部径55.3cm、底部径9.9cm、 胴部最大径57.6cmである。口縁部は外傾し、胴部



第11図 I-E区 甕棺および甕棺墓出土遺物実測図 (1/3、1/2、1/12)

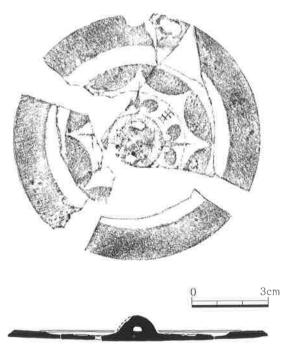
には低い三角の突帯を2条巡らせる。時期はIIb期にあたる。棺内からは石剣の切先が3本分出土した。 このうち、2と3は同一個体であり接合するが、分離した状況で発見された。したがって、被葬者の体内において折損した可能性がある。

14号甕棺墓 (図11-1・14) 単棺で器高90.5cm、口縁部径67.5cm、底部径13.8cm、胴部最大径68.5 cmであり、低い三角の突帯を1条巡らせる。全体にナデを行うが、底部付近にハケ目が残る。時期はII bl期にあたる。棺内からは石剣の切先が1点出土した。刃の先端と両側が欠損し、剝雕痕も見られる。

(2) 鏡出土土坑

鏡の出土状況(図13、P.15) I-E区の西側、 谷への傾斜部分の近くに位置する。墓坑は約2.2m ×1.4mの大きな攪乱を受けており、副葬品である 鏡やヒスイ製の勾玉は攪乱坑内に散乱した状況であった。

わずかに攪乱を免れた北東部分の隅を観察すると、 棺の内外に朱を撒いた痕跡が見られた。この部分を 起点としてかつての墓坑の姿を想定すると幅約1m、 長さ3m以上で底面は船底形を呈していたものと思

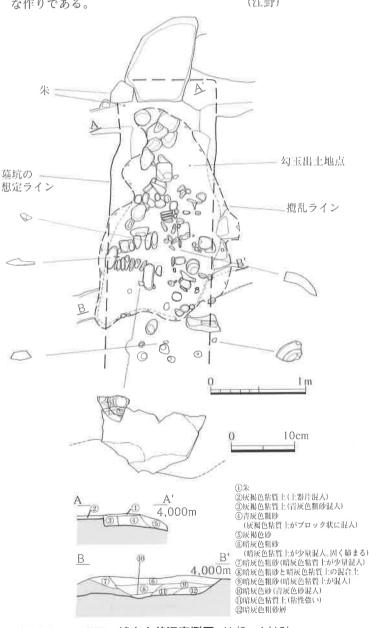


第12図 I-E区 蝙蝠座鈕「位至三公」銘 八弧内行花文鏡実測図 (2/3)

われる。また、墓坑周囲の地形を見ると一段高くなっており、盛土や周溝などは観察されなかったものの墳丘などの区画が存在した可能性がある。 時期については不明であり、今後の課題である。

銅鏡 蝙蝠座鈕「位至三公」銘八弧内行花文鏡 図 12、P.15) 8つの破片に分かれて出土した。復元径は10.2cmで端部がやや反る。銘文は「至」の一字のみが残っており、他の文字は出土していないが、かつては「位」「三」「公」があったと推測される。

ヒスイ製勾玉 (P.15) 攪乱坑内の南東部から出 土した。小型で1.5cm×0.9cm、厚さは4mmで、丁寧 な作りである。 (江野)



第13図 I-E区 鏡出土状況実測図 (1/6、1/40)

9. 古墳時代の墓

(1) 木蓋土坑墓 (P.16)

II 区北端に位置し、2基の土坑墓が検出された。

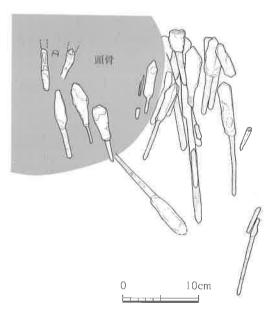
1号木蓋土坑墓(図15-1) 長さ約1.7m、幅約 68cm、深さ約30cmを測り、人骨が良好に残存して いる。副葬品は、鉄鏃約20本が人骨の頭部に落ち 込むように検出された (図14)。また、脚部付近に も高坏片が見られることから、木蓋が存在したと考 えられ、鉄鏃は頭部付近に棺外副葬されていたので あろう。

人骨は身長160cm前後で40歳前後の熟年男性で あった。

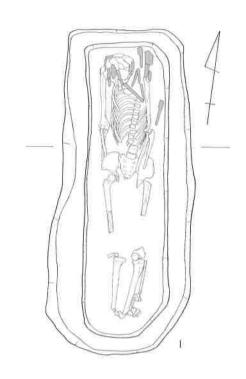
鉄鏃は、柳葉形で矢柄まで良好に残っているもの もあるが、形式より古墳時代前期と考えられる。

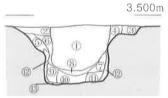
2号木蓋土坑墓(第15図-2) 長さ約1.25m、幅 約79㎝、深さ約15㎝を測り、副葬品は無いが、人 骨がかろうじて残存していた。奥歯が永久歯に生え 変わっていたことから7歳前後の小児骨で、性別に ついては不明である。

古墳時代前期の人骨で、良好に残っている例は少 なく、副葬品も比較的良好に残存していたため、人 骨を含めた遺構の切り取り作業を行った。このよう な保存は、九州でも稀であり、注目される。



第14図 Ⅱ区鉄鏃出土状況実測図 (1/5)





木蓋の上の

流れ込み

上器が多く混人)

(母店暗茶褐色精質上: ⑤思茶色料質上に削茶色のブロックが混じる)
⑥明黒茶色粘質上(川茶色のブロックが混じる)
⑥明黒茶色粘質上(川茶色のブロックが混じる)
⑦暗黄褐色粘質上(明黄色の地由ブロックを多く含む)
⑥オ明茶褐色粘質上(明茶色のブロックを多く含む)
⑥緑色ブロック+黄褐色ブロック

●報告プロック ●明茶色粘質上 単出茶色粘料上 木柏前跡? 60年福色集實士 1 m

第15図 Ⅱ区 1号および2号木蓋土坑墓人骨出土状況実測図 (1/20)

(2) 人骨の取り上げ

人骨の取り上げ作業の概要について以下に説明す

3



①遺構の周りを掘り下げ、凸状に成形する。



②合板で挟み、仮補強した後、濡らした紙タオル、アルミホイルで表面を保護する。



③発泡ウレタンを流し込む。



④板を遺構の下に打ち込み、神輿状にしたの ち、運び出す。室内で裏返しにする。

⑤裏側から余分な土を除去し、裏面にシリコーン樹脂を流し、ダンボールで外枠を作る。



⑥ポリエステル樹脂、FRPによる底面の強化



⑦裏返し、表から慎重にウレタン樹脂を除去する



⑧バインダー17を塗布して、仕上げる。

10. おわりに

以上、遺跡の内容を概括的に見てきたが、ここで 特徴を簡単に述べたい。

本遺跡は弥生時代中期~中世にかけての複合遺跡であるが、やはり注目されるのは玉作遺跡であろう。

九州において碧玉を出土した遺跡は弥生時代後期 後半以降を挙げると、福岡市博多区博多遺跡群第 17次調査(弥生時代後期後半)、甘木市平塚川添遺 跡(弥生時代後期後半)、福岡市早良区西新町遺跡 第12次調査(弥生時代終末~古墳時代初頭)など があり、碧玉の原石および管玉未製品が出土してい る。この中で、博多遺跡群第17次調査では竪穴住 居の床面や土坑から、碧玉剝片が出土し、平塚川添 遺跡では住居および溝から碧玉製管玉の製品や未製 品が出土している。これらの調査では残念ながら原 石から製品までの製作工程を追える資料は出土して いないが、小規模ながらも碧玉の玉作が行われてい る。また、西新町遺跡では河原や海辺から採取した 凝灰質泥岩を使用し、研磨を非常に多用した勾玉製 作を行っているほか、ガラス製勾玉や丸玉、小玉の 鋳型が出土している。

水晶では福岡市東区三苫永浦遺跡や前原市三雲サキゾノ遺跡があり、特に三苫永浦遺跡の7号竪穴住居の壁際土坑からは多数の水晶の剝片が検出されており、注目される。ここでは一般的な竪穴住居で製作されており、他の住居でも、非常に少量の出土ではあるが、水晶の玉作が行われていた可能性が高い。

一方、本遺跡では、本格的な玉作が行われており、 特徴として、以下の4点が挙げられる。

- ① 工房は9600㎡以上の広大な面積に多数存在し、この時期に見られるような一般的な竪穴住居にない独特の形態である。加えて碧玉や水晶製玉類の製作過程を追える資料の出土、それに伴う鉄製工具の出土などから鑑みて、専門的な玉作集団と考えられる。
- ② 碧玉の出土総数は、山陰や北陸など原産地近

くの玉作遺跡と比べると少ないが、これは碧玉 のほとんどが花仙山産であり、原石を搬入して 玉作が行なわれるという特徴を反映したものと 考えられる。

- ③ 鉄製工具の使用や工房を円形に取り囲む排水 溝などは、平所遺跡(島根県松江市)や林・藤 島遺跡(福井県福井市)などに見られるが、水 晶については、平所遺跡と共通する技法が見ら れること、山陰系土器の出土、碧玉の原産地で あること等から、特に山陰地方との強い結びつ きが想定される。
- ④ 潤地頭給遺跡と山陰地方における花仙山産碧 玉、水晶の玉作の開始とはほぼ併行する。

これらの特徴は原石や土器だけでなく玉作技術の 総体が交流していると考えられ、それは「伊都国」 の政治的意図が大きく反映したものと考えられる。 今回の調査によって「伊都国」の繁栄を支えた経済 基盤の一部を窺い知ることができると同時に「伊都国」 の従来象に新たな側面を付け加えることになった。

(江﨑)

ilE)

- i) 橋口達也 1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貨自動車 道関係埋蔵文化財調査報告書XXXI』福岡県教育委員会
- ii) 堀部第3遺跡(島根県鹿島町)では弥生時代終末期の玉作遺跡が発見され、弥生時代後期中薬の北部九州の複合口縁壺が出土している。同町の稗田遺跡では古墳時代初頭の船材が出土し、周辺の遺跡では鉄器が豊富に存在することから、弥生時代後期~古墳時代初頭にかけての鉄素材と碧玉製品の日本海ルートの交易を想定しており、注目される。

【参考文献】

- 柳沢一男 1985「第17・20次調査の概要」『博多Ⅲ』 福岡市教育委員会
- 2. 松尾宏編 2001『平塚川添遺跡 I』 甘木市教育委員会
- 3. 森井啓次編 2001『西新町遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会
- 4. 寺村光晴 1968『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 5. 寺村光晴 1980『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館
- 6. 庭島町立歴史民俗資料館 2003 「海の記憶一波涛を越 えた人々」 庭島町立歴史民俗資料館2003年特別展示図録
- 7. 財団法人 石川県埋蔵文化財センター 2003「環日本海 交流史研究集会記録―玉をめぐる交流―」 『石川県埋蔵文 化財情報』第10号

報告書抄録

ふりがな	うるうし	じとうきゅう	いせき									
書 名	潤地頭給遺跡											
副書名	福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査概要											
巻 次												
シリーズ名	前原市文化財調查報告替											
シリーズ番号	第89集											
著 者 名	江野道和 江﨑靖隆											
編集機関	前原市教育委員会											
所 在 地	〒819-1192 福岡県前原市前原西一丁目8番14号											
発行年月日	西暦200	05年3月31日										
保 管 場 所	〔写真〕	(図版) 〔	遺物)	前原	市教育委員会							
保管場所所在地	福岡県育	前原市前原西	一丁頁8	3番14号								
所収遺跡名				コード北線		東経	調査期間	調査		調査		
	所 在 地		市町村	寸 遺跡番号	नाच गवाः	AK NEE.	10/0 == 2411/1	面積		原因		
潤地頭給遺跡	福岡県前大字潤字		4022	2	33° 33′ 51″ ~33′ 52″	130° 13′ 13″ ~03″	2003.1~ 2004.3		40000㎡ 小学 の内、 校 建 22,000㎡ 設			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構			主な遺物			特記事項		
潤地頭給遺跡	集落、 墓地、 生産遺 跡	弥生時代 前期末、終末 心計 前半、墳 、 一 前 半、墳 、 市 半、墳 、 古 前 半、 村 中 中 中 、 中 中 、 中 、 中 、 中 、 中 、 中 、 中	期期前墳房	坑墓、祭祀土	、溝、甕棺墓、 坑、玉作工房 坑墓、竪穴住 墓	弥生土器、石剣、石庖丁、石 斧、石鏃、投弾、甕棺、銅釧、 銅鏡、ヒスイ製勾玉、碧玉、 水晶、メノウ、鉄石英、蛇紋 岩、井戸転用準構造船、剣装 具、須恵器、土師器、鉄鏃、 金槌、蔵骨器、動物遺体						

潤地頭給遺跡

- 福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査概要-前原市文化財調査報告書 第89集 2005年3月31日

発 行 前原市教育委員会 福岡県前原市前原西一丁目8番14号 TEL 092-323-1111

印 刷 株式会社 重富印刷 福岡県前原市前原東三丁目1番8号 TEL 092-322-0191 FAX 092-324-2661

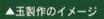














▲ 勾玉・管玉の装着イメージ

